伝統工芸・伝統産業などに関わるミュージアムでの障害者等のアクセシビリティと教育普及プログラムに関する調査報告書

一般財団法人たんぽぽの家

文化庁委託事業
「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

はじめに

NEW TRADITIONAL（以下ニュートラ）は、福祉×伝統工芸の可能性に着目し、新しい生活文化を提案することをめざすプロジェクトである。

これまで、福祉施設とデザイナーの協働による実例づくりや展覧会、産地や素材をめぐるリサーチツアー、つくり手の技や知恵と障害のある人の手仕事の技術交流など、地域・福祉・工芸をつなぐ活動を行ってきた。国内各地でそうした活動をするなかで、異なる分野をつなぐコーディネーターが必要なことや、福祉とものづくりの領域の人たちが出会い、学び合う場が必要であることがわかった。

そこで2022年度は、令和4年度文化庁委託事業「障害者等による文化芸術活動推進事業」の中で、「障害者等による文化芸術活動の推進に関する先導的な取組を全国へ普及展開するための人材の育成等の取組」として「ニュートラの学校：福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり」を実施した。

人材育成のフィールドとして、大きく分けて3つの分野での実践を重ねた。

1　福祉分野をはじめ、伝統工芸やまちづくり、デザインなどに関心をもつ人が集う場
2　伝統工芸や伝統産業などに関わるミュージアム
3　伝統工芸の伝え手・つくり手の学びの場である芸術系大学

本冊子は、これらの実践の中から特に、項目2の伝統工芸や伝統産業などに関わるミュージアムと連携して行った取り組みについてまとめたものである。

文化庁委託事業
「ニュートラの学校：福祉と伝統工芸をつなぐ人材育成と仕組みづくり」
（令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業）

本報告書の内容

伝統工芸や伝統産業などに関わるミュージアムでの人材育成について、3つの章でまとめている。各章ごとの概要は以下のとおりである。

1.ミュージアムでの障害者などのアクセシビリティと教育普及プログラムのアンケート調査

「ミュージアムでの障害者などのアクセシビリティと教育普及プログラムのアンケート調査」の目的や調査方法と結果をグラフとテキストでまとめた。アンケートの送付対象は、国公立の美術館・博物館、伝統工芸品や地域の工芸品を扱うミュージアムなど。施設規模の大小や公立/私立の違いなど多岐にわたっている。国公立の美術館・博物館には、その地域ゆかりの工芸品などが所蔵されていることが多いため、国内各地に存在する施設にアンケートを送付した。また、伝統的な素材や技法の名称で情報収集し、比較的小規模な施設にも同じ内容のアンケートを送付した。いずれも、オンラインフォームのほか、郵送やFaxなどの方法で回答を得た。

障害のある人や高齢者、子どもや外国人など、多様な人の来館を促すような取り組みをしているか、教育普及プログラムの実施の現状のほか、多様な人がものづくりを学ぶことができるようになるために、必要なことなどについても回答を得た。

2. ヒアリング調査

先進的な取り組みを行い、なおかつアンケート調査の中でNEW TRADITINOAL事業と連携したプログラム開発について、連携・協力可能と回答があった施設を中心に、5ヵ所を選出してヒアリング調査を行った。オンラインあるいは施設を直接訪問して、各施設の館長や学芸員、教育普及の担当者に、伝統工芸や伝統産業に関わるミュージアムに多様な人が訪れるようになるために行なっている取り組みの現状や課題を聞いた。ここではその内容を、展示・アクセシビリティ・教育普及プログラムの項目にまとめている。なお、ヒアリング先の選出にあたっては、ミュージアムの規模、公立と私立、ものづくりの分野の違いなどを考慮した。

3. ラーニングプログラムの実施

伝統工芸や伝統産業に関わるミュージアムとともに、障害のある人や高齢者、子どもや外国人など、多様な人が訪れる契機となるようなラーニングプログラムを開発・実施した。各地の伝統や文化を学ぶ時間がプログラムに組み込まれていたり、地域にゆかりのある素材をつかうなど、その土地でしかできない体験を提供するプログラムになっている。また、ものづくりの体験だけでなく、多様な人との鑑賞や、対話の場をつくった。この章では、それらの取り組みの報告と、プログラムの開発・実施をとおして、各ミュージアムや施設の担当者が感じたことを聞き取り、まとめた。

※本冊子に掲載している内容は取材および企画実施当時の情報に基づく。

CONTENTS

はじめに …… 1

本報告書の内容 …… 2

1 ミュージアムでの
障害者等のアクセシビリティと
教育普及プログラムのアンケート調査 …… 4

2 ヒアリング調査

❶九州国立博物館 …… 14
❷木組み博物館 …… 16
❸さいたま市岩槻人形博物館 …… 18
❹多治見市美濃焼ミュージアム …… 20
❺京都伝統産業ミュージアム …… 22

3 ラーニングプログラムの実施

❶京都伝統産業ミュージアム …… 24
❷多治見市美濃焼ミュージアム …… 30
❸平城宮跡歴史公園 …… 32

調査の振り返りと今後の展望 …… 34

1 ミュージアムでの障害者等のアクセシビリティと教育普及プログラムのアンケート調査

1. 目的

伝統工芸や伝統産業の担い手が減少していくなかで、障害のある人をはじめとした地域の人がつくり手となる地域の工房として福祉施設に大きな可能性があることを、ニュートラ事業を推進しながら実感してきた。しかしながら、伝統工芸の分野では、工芸のもつ魅力や価値を社会に伝える側が、これまで障害のある人をはじめとする多様な人たちにその魅力を伝える機会が少ないことも明らかになった。そこで今年度は、各地の伝統工芸にかかわる、伝統産業のミュージアムなどと連携し、専門的な伝統工芸のイメージをひらかれたものにするために、障害のある人や子どもなど地域の人たちがものづくりを楽しく学ぶことができるプログラムを開発することにした。

それにあたり、まず最初に、ミュージアムでの障害者等のアクセシビリティと教育普及プログラムの現状について知るために、アンケート調査を行った。

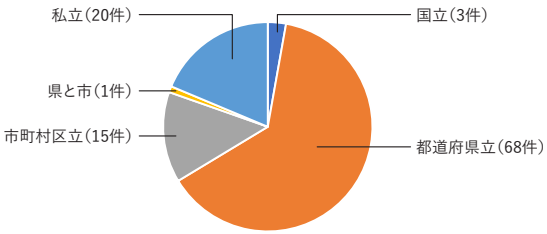
2. 調査項目

A . ミュージアムの概要
B . アクセシビリティ向上に関する取り組み状況
C . 教育普及プログラム
D . NEW TRADITIONAL事業と連携したプログラム開発

3. 調査概要

- 調査期間　2022年7月15日（金）～ 2022年7月31日（日）
- 対　　象　日本全国の伝統工芸や伝統産業にかかわる美術館・博物館
- 調査方法　アンケート調査（郵送もしくはオンラインで実施）
- 送 付 数　403件
- 回 答 数　107件（回答率　26.5%）

回答したミュージアムの運営主体

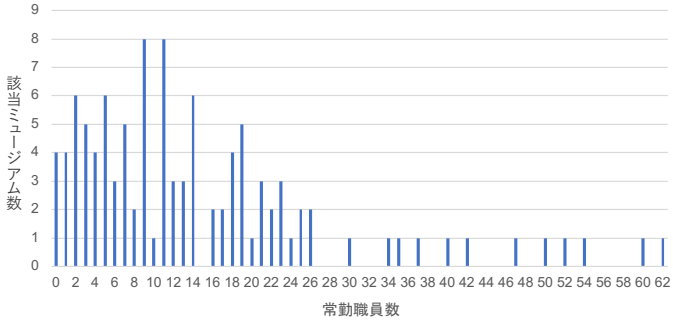


回答数107施設のうち、公立は87、私立が20と、公立が多く、なかでも都道府県立の施設が圧倒的に多かった。

4. 結果

A. ミュージアムの概要

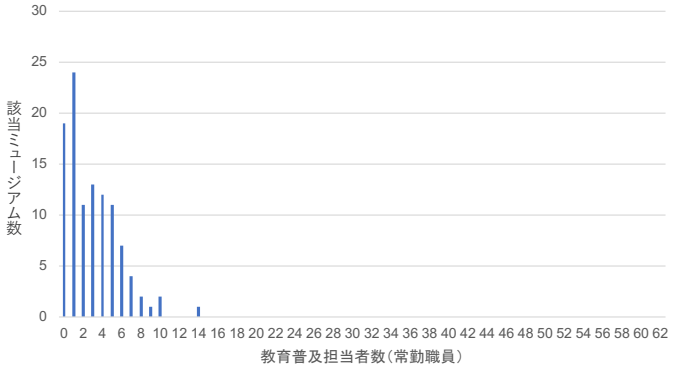
A-1　常勤職員数



最高値	62
最低値	0
平均値	15

最高62名、最低0名と施設規模の差が大きかった。常勤15名以下の小規模施設、20名前後の中規模施設の分布が多かった。

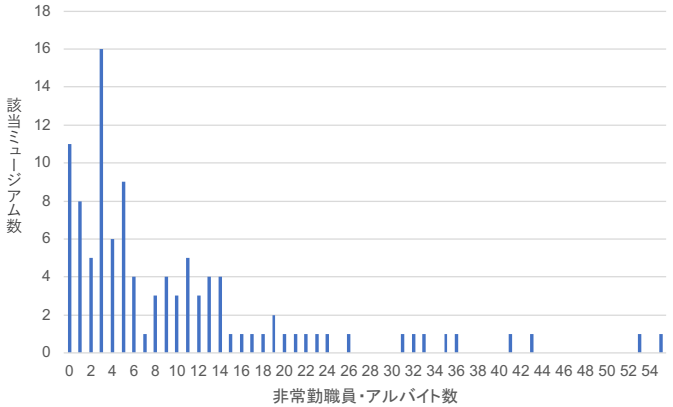
A-2　教育普及担当者数（常勤職員）



最高値	14
最低値	0
平均値	3

教育普及を担当する常勤職員の数は、ゼロもしくは1名である施設が多かった。7名を超える教育普及担当者を抱える施設はまれであった。

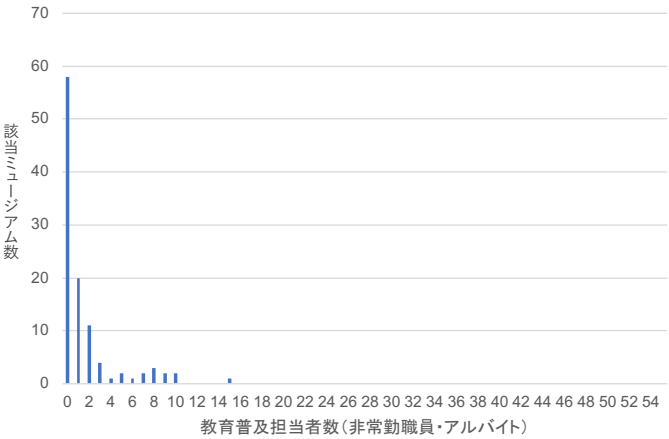
A-3　非常勤職員・アルバイト数



最高値	55
最低値	0
平均値	10

こちらも施設規模の差が大きかったが、非常勤スタッフの分布としては、3名前後の施設と10名前後の施設の分布が多かった。

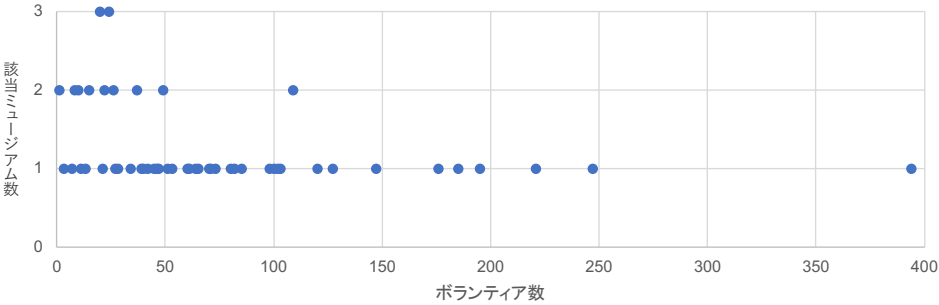
A-4　教育普及担当者数（非常勤職員・アルバイト）



最高値	15
最低値	0
平均値	2

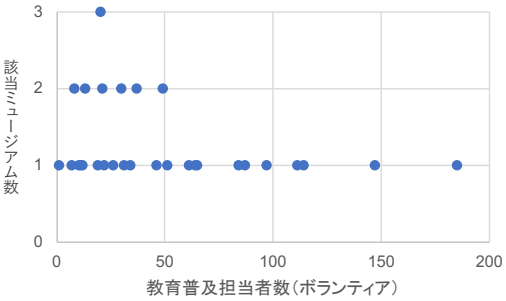
非常勤スタッフのなかで教育普及の担当者数ゼロの組織が圧倒的に多かった。ほとんどの組織が1〜2名に留まっていた。

A-5　ボランティア数



ボランティア数がゼロの組織は107件中、44件と多くを占めていた。残り63件のボランティアを抱える施設においては、1名から394名まで、数のばらつきが非常に大きかった。

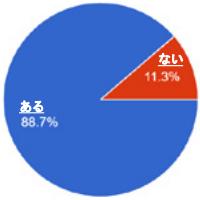
A-6　教育普及担当者数（ボランティア）



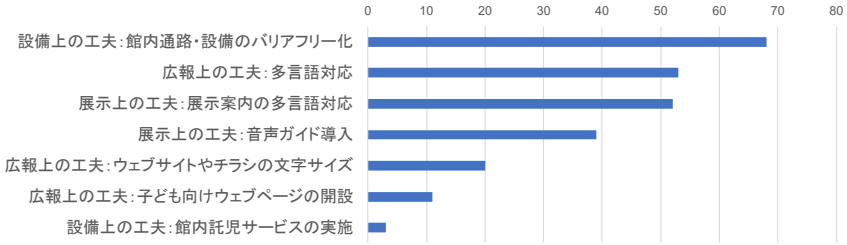
教育普及を担当するボランティアを抱える組織は37件であった。こちらも1名から185名まで、数のばらつきが非常に大きかった。

B．アクセシビリティ向上に関する取り組み状況

B-1　障害者や高齢者、子どもや外国人など、多様な人の来館を促すような、アクセシビリティ向上のために取り組んでいることはありますか？



B-2　具体的にどのような工夫をされているか教えてください（複数回答可）



その他（自由記述）には、18件の回答があった。以下、項目に分けて記述する。

障害のある人向け

■解説ツール
- 音声解説をテキスト化した冊子の導入
- 受付への点字ガイド、筆談ツールの設置
- HPの読み上げ機能
- 作品の触図（立体コピー）を制作し、触って鑑賞ができるブースの設置

■設備
- オストメイト対応型トイレ、多目的トイレ
- 点字ブロック、触地図
- 車椅子設置、貸出
- 障害者駐車場の確保

■制度・連携
- 展示料金の配慮（当事者や同伴者、割引、無料など）
- ユニバーサルミュージアム事業の実施
- ボランティアに車椅子の使用手順の勉強会を開催

外国人向け

■解説ツール
- 多言語タブレットの貸出
- 英語版パンフレット、解説テキスト

■制度・連携
- 外国人観光客（長期滞在者・留学生を含む）と付添の観光ボランティアガイドの方の観覧料無料

子ども、ファミリー向け

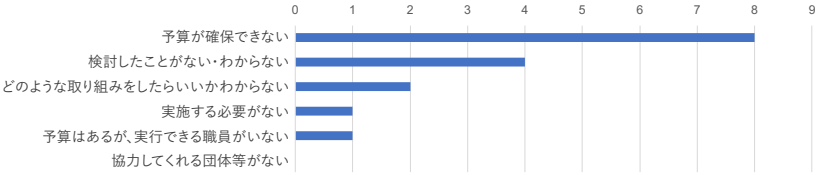
■解説ツール
- 子ども向け解説パネルの設置
- ファミリー鑑賞会

■設備
- おむつ替え台
- 授乳室（男女問わず利用できるところも）
- ミルク用白湯の提供
- ファミリートイレ
- キッズルーム
- ベビーカー貸出

■制度・連携
- 展示料金の配慮（中学生以下無料など）
- プレミュージアム事業の実施
- 市の保健師と市内の子育て支援施設と連携し、未就園児を対象とした、身体計測と親子で参加できる簡単な体験を併せたプログラムの実施
- 地域の小学校を対象とした陶芸教室の開催

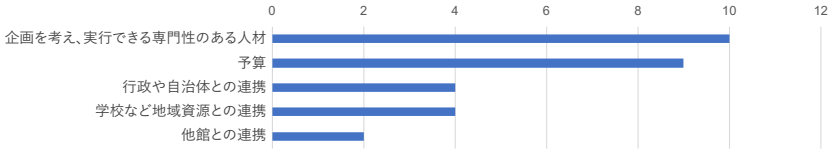
その他
- アプリでの解説導入
- YouTube動画の発信
- wifi環境の整備、ポケット学芸員の導入
- すべての展示物に触れることができる

B-3　<現時点でアクセシビリティ向上に取り組んでいることはないと回答された方>
取り組んでいない理由を教えてください（複数回答可）



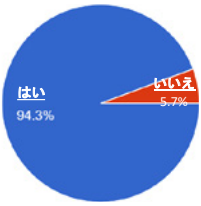
■その他の回答
- 現状で手一杯
- 人員不足
- 事情・状況による
- 取り組みではないが、求めに応じて障害のある方々を受け入れている。匂玉づくりなど

B-4　<現時点でアクセシビリティ向上に取り組んでいることはないと回答された方>
どのようなことがあれば多様な人のアクセシビリティが高まると考えられますか？

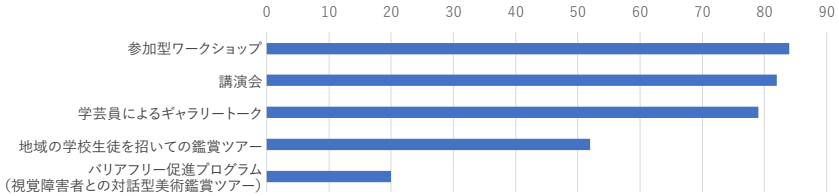


C．教育普及プログラム

C-1　貴館では教育普及プログラムを行っていますか？



C-2　<教育普及プログラムを行っていると回答された方>
館内でプログラムを実施している場合、内容を具体的に教えてください（複数回答可）



■その他の回答（抜粋）
- アートコミュニケーターの育成、アートラボの運営
- 鑑賞教育入門講座など教員向け講座
- 手話や英語によるガイドツアー
- 障害のある人のための特別鑑賞日の設定、特別支援学校の生徒のための鑑賞・ワークショップの実施等
- 休館日の見学受入、バス（貸し切り）による現地ツアー等
- 未就学児向けのファミリープログラム
- 子ども向けギャラリートーク、子ども向けワークシート
- 映画上映、コンサート、星茶席
- 歴史講座、史料講座（古文書講座）

C-3 ＜教育普及プログラムを行っていると回答された方＞ 館外でのアウトリーチ的な取り組みを行っている場合、内容を具体的に教えてください（複数回答可）

■その他の回答（抜粋）
- 貸出教材の提供
- 美術館教育素材の製作
- しがらき学のススメ　やきもの体験講座
- Webによる学校などへの鑑賞教育プログラム
- 外部イベントでのワークショップ
- 子ども学芸員体験事業
- 県内の盲・ろう・特別支援学校、院内学級への出前授業

C-4 ＜教育普及プログラムを行っていると回答された方＞ 貴館の行っているプログラムの特徴や工夫があれば教えてください（複数回答可）

65件の回答あり。以下、抜粋して、項目に分けて記述する。

障害のある人向け

■展示方法・テーマ設定
- 障害当事者と共同で発案・運営するプログラムが増えることを目標にしている
- 視覚障害者を対象に触察ワークショップを実施。参加者と事前に打ち合わせをしてプログラム化している
- 「心理的バリア・ボーダーを解消すること」や「来館者同士の轢を解消すること」等を目的としたプログラムの実施
- 手話通訳付のミュージアムトーク
- 離島や特別支援学校への移動博物館を実施している
- 「むすんでひらいてプロジェクト」。当館では、それまで展覧会関連事業や単発のイベントとして、障害者や定住外国人など、美術館を普段利用することが難しい方を対象に実施してきたインクルーシブ事業を、平成30年度から「むすんでひらいてプロジェクト」として統合し、より計画的、効果的な実施を図ってきた。その結果、従来の養護学校や特別支援学級との連携事業に加え、放課後等デイサービスや県立こども医療センターなどへの積極的なアウトリーチを展開するようになっていた

子ども、ファミリー向け

■地域連携
- 年間30回土曜日に午後に開催している子供向けの事業（ワークショップ）「MOMASのとびら」は、近隣の埼玉大学の学生と一緒に運営をしている
- 「高階秀爾館長による美術教室」、「夏の美術講座」、倉敷市を中心とした保育園・幼稚園の園児の受け入れ（鑑賞支援）、遠足・校外学習、修学旅行の学生団体の受け入れ（鑑賞支援）、チルドレンズ・アート・ミュージアム（展示室を会場とした大型ワークショップイベント）、学校まるごと美術館（近隣の小学校の全校児童が休館日に美術館へ来館し、学校教員が美術館で授業を行う）など
- 大学の教育学部と連携して地元の画家の技法に焦点を当てた幼児～小学生向けの地域密着型アートショップを開催し、子どもたちの創作の場、学生と子どもたちとのふれあいの場を設けている
- 美術館の枠組みにとらわれない日常的なテーマでも事業を行う（教育機関と連携したコンサート、マルシェ、未就園児の身体測定と体験プログラム等）

■展示方法・テーマ設定
- 先生と相談しながらプログラムを策定する
- オンライン出前授業やVR古代体験などを用意して学校の要望に対応する
- 学校または社会教育施設向けに、絵巻や掛軸の複製を貸し出している（日本画トランク貸出事業）
- 本物の作品に出会うこと、作品を起点としたワークショップを行うことを大切にしている。特に以前はミュージアムで積極的に迎えられなかった、子どもや学校に対する事業に力を入れてきた歴史がある。子どもを対象としたイベントには、たくさんの子どもが参加してくれている（障害を持つ方や外国の方も参加されていると思うが、データを取っていないのでわからない）

■体験
- 小学校を対象に企業からの支援を得て、バス借上料を助成し、対話型鑑賞プログラムを実施
- 夏休みに開催している親子竹細工体験
- 植物園地を活用した「クイズラリー」「ビンゴ」、広場を活用した「空飛ぶタネの不思議」など
- 学校団体鑑賞とワークショップを一日で体験できるプログラムの実施。また、出前プログラム（アウトリーチ）を積極的に実施
- 出前授業…体験型。土器観察では埼玉県内から出土した本物の土器を触って観察することができる。その他にも、昔の道具体験やまが玉作りをするプログラムがある
- 学校団体受入…校外学習で利用の学校団体に対し、体験型のプログラムを用意している。主に、昔の道具体験や火おこし実演、まが玉づくり、藍染ハンカチづくり体験等、様々なプログラムを学校の要望に合わせて実施
- 「歌人が学校に！－選歌と講評から学ぶ」著名な歌人を招き、学校で短歌についての授業を行う
- 学校指導要領に沿ったプログラム（郷土学習）

- 「チャレンジ!かいこプログラム」を称して蚕種配布、かいこ教室、たのしいかいこ発表会等のイベントや通年開催のワークショップ、団体利用等の実施を通して、蚕に関する子供向け教育事業を実施している
- 来館した学校団体向けに、筆や毛筆を使った模写など日本画体験を行っている
- 西陣織についての説明など、小学生と職人が間近で接する機会づくり
- 文学館として絵本の読み聞かせを実施

■コンクール
- 毎年、小学生・中学生・高校生・特別支援学校生を対象に、鑑賞や表現活動につながるコンクールを開催している
- 参加型の展示:「小学生によるデザインはがき展」毎年和紙のはがきを参加校に提供し、それを用いてつくられた児童の作品のコンテストと展示を行っている
- 毎年、小学生・中学生・高校生・特別支援学校生を対象に、鑑賞や表現活動につながるコンクールを開催している

一般向け

■地域連携
- 美博オリジナルのワークショップのほか、県内大学と共催のワークショップを行っている
- 地域のアイヌの古老に歴史や文化、口承文芸などを話してもらう講話の実施

■展示方法・テーマ設定
- 見て、触ってなど五感を意識したワークショップを開催
- 五感体験型からより能動的で心に深く刻まれる参画型の生きた博物館を目指している
- さわれるレプリカ
- 参加者がただ受け身で終わることのないよう仕掛けを施すことで、自身で考えさせ、より意義のある参加体験になるよう心掛けている
- 年度に3回程度開催している展覧会の“鑑賞を深めるきっかけづくり”を念頭に、展覧会のテーマ等をより深め・広げるための様々な内容・手法の事業を企画している
- 多彩なプログラムを実施。展示室、アトリエ、ギャラリーで「みる+つくる+発表する」といった複合的な活動を目指している

■体験
- 対話を用いた美術作品の鑑賞
- コロナ禍であっても主体的な鑑賞ができるよう、ワークシートを活用した対話型鑑賞活動の実施
- 考古資料、民俗文化財に関するものづくり体験などの体験学習会、講座・シンポジウムの実施
- 資料貸出し…土器や民俗資料などを貸し出している
- 日常の昔のくらしを体験できるプログラム
- 移動文学館(展示内容をコンパクトに求めたセットを貸出)
  <特徴>江戸東京の文化を伝える様々なアイテム(甲冑のレプリカ、歌舞伎の鳴物、蓄音機など)を使った体験型のプログラムを実施している。<工夫>豊富な実物資料と実物大の住宅模型の精巧なジオラマ、体験展示を活用して、当時の暮らしぶりがイメージしやすいよう工夫している
- 中心市街地に近い里山に立地する総合博物館として、自然や歴史、文化に親しみながら健康増進にも資する形で、地域を再発見するウォーキングイベントの開催
- 生涯学習団体と連携し、館のいろりを囲んで伝説や民話の語りに親しむプログラムを継続している。築160年の茅葺合掌屋根建物という博物館の特性を活かしている
- 陶芸など、初心者向けに特化した体験教室をとおして生涯学習へのきっかけづくりの場とし、作家の工房など、より高度な生涯学習への橋渡しとしている

一般向けのなかで、特に伝統産業や伝統工芸に関係するもの

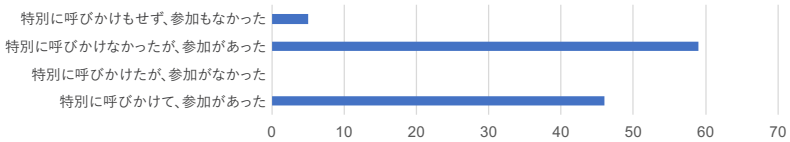
■地域連携
- 今日、生産されなくなった地域の伝統工芸品について、生産方法等に関する情報を明示し啓発している
- 地域に所在する大学校の伝統産業の事業場・事業内容・質疑応答などによる伝統産業の問題点などの研究に協力している美術館が多様な作品や価値観の出会いの場となり、地域住民や教育機関と連携しながら地域のコミュニティのハブとして機能していくための多彩な事業を展開

■体験
- 七宝焼体験
- 紙漉き体験の実施。手漉き和紙である出雲民藝紙を使った創作活動
- 養蚕事業から続く「まゆ細工体験」など
- 指物組立体験、アルミ板を用いた金具作り体験
- 観光施設のための手織体験や着付体験

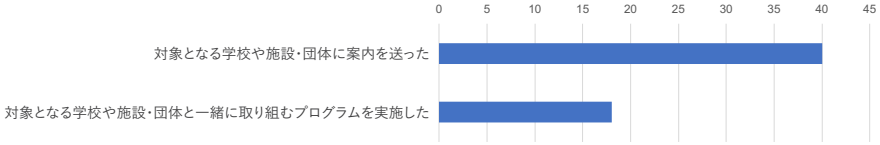
外国人向け

外国人向けの工夫が書かれた記述は、特になかった

C-5 <教育普及プログラムを行っていると回答された方>
教育普及プログラムに、これまで障害者や高齢者、子どもや外国人等の参加はありましたか？
（複数回答可）



C-6　＜教育普及プログラム実施時に、参加を促す特別な呼びかけをしたと回答された方＞どのような呼びかけを特別に行いましたか？（複数回答可）



■その他の回答（抜粋）

- 対話型鑑賞プログラム（バス代の一部を当館が補助する事業）については、各市町村教育委員会に事業内容を説明するとともに、所管する小学校へのプログラムへの参加について、協力を依頼した
- 手話や英語によるガイドツアー開催周知のチラシを配布
- 今年3月に実施した「アートコミュニケーションプログラム」で、中学生以下を対象とする回を設定して周知し、実際に応募・参加があった
- インターナショナルスクールの参加、伊賀市内の作業所との連携など多数
- 子供向けのチラシを作成・配布した

C-7　＜教育普及プログラムを行っていないと回答された方＞行っていない理由を教えてください

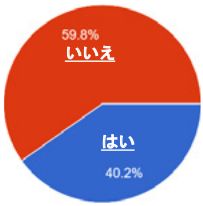
「実施する必要がない」に3件、「予算が確保できない」に2件、「現状で手一杯」、「人員不足」、「どのような取り組みをしたらいいかわからない」にそれぞれ1件の回答があった。「協力してくれる団体がない」には回答がなかった。

C-8　＜教育普及プログラムを行っていないと回答された方＞どのようなことがあれば実現できると考えられますか？（複数回答可）

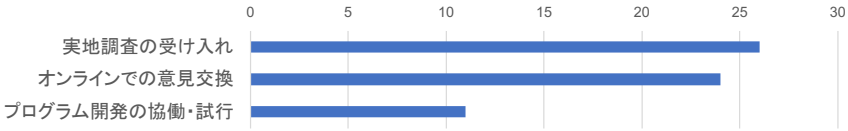
「企画を立案し実行できる専門性のある人材」、「予算」にそれぞれ4件、「学校など地域資源との連携」、「事情、状況による　主に人員補充」にそれぞれ1件の回答があった。「行政や自治体との連携」、「他館との連携」、「検討したことがない・わからない」には回答がなかった。

D . NEW TRADITIONAL事業と連携したプログラム開発

D-1　一般財団法人たんぽぽの家では今年度（2022年度）、伝統工芸・伝統産業などにかかわるミュージアムと連携して、障害者や高齢者、子どもや外国人等、地域の人たちと伝統的なものづくりを学ぶことができる教育普及プログラムの開発を予定しています。開発にあたって連携・協力いただくことは可能でしょうか？



D-2　＜開発に連携・協力することが可能と回答いただいた方＞検討可能な範囲を教えてください（複数回答可）



■その他の回答（抜粋）

- ものづくりイベントへの参加
- 当館は設問の「伝統工芸・伝統産業等にかかわるミュージアム」に該当しないが、考古資料及び民俗文化財の保存・活用を目的とする博物館施設として教育普及プログラムを実施しており、当該目的による意見交換は可能
- 体験場所としての提供や、地域情報の提供等
- レファレンスの範囲内であれば協力できると思います
- 館運営に支障のない範囲での連携・協力

D-3　将来的に多様な人がものづくりを学ぶことができる環境をつくるには、どのような知識や経験が必要だと考えていますか？

52件の回答あり。以下、抜粋して、項目に分けて記述する。

■多様な人に対するスタンス・姿勢
- 語学スキル、障害特性、加齢などの専門的知識
- 障害者・高齢者等への対応経験（緊急時対応など）、教育福祉に従事した経験など
- ノーマライゼーションやダイバーシティへの正しい理解（多様な人の存在を知る。学校教育を含め、社会が多様な人との協働こそ、より持続可能な文化を育むという価値観をもつなど）
- 研修や研究会への参加（多様な人へのコミュニケーション、バリアフリーやユニバーサルデザインなど）
- 組織内での協力体制や理解（美術館の場合、全員が必要性を感じていない場合も多いので）
- 当事者との連携（立案からターゲットとする当事者が参加するなど）
- 多様な人がものづくりを学ぶ環境に関わり、支えられる人材となるには、多様な人と直接会って関わる機会が圧倒的に重要だと考えている。生身の経験が無ければ、どうしてもそのような人々について想像力が働きにくく、偏ったイメージを抱いてトラブルを招くことにも繋がる

また「多様な人」ではなく、個人として知り合うことができれば、知識を得ていく強い動機と続けていく推進力にもなりうる

■ものづくりに触れる機会の創出
- 「興味を持つこと」、「触れること」その『きっかけ作り』が大事
- 一流の人の一流の指導による本物のモノづくりを体験すること
- その「もの」の本質を正しく理解し、その価値を広く普及できるための知識や経験を得ること。そのためには実際の「ものづくり」を体験できる環境を多くの人に提供できる官民あげての社会的基盤作りの整備が必要か

■技術伝承の仕組みと人材確保
- 専門家やプロの技をもつ人、実際に伝統工業、伝統産業にかかわっている人からの指導
- 初心者にもわかりやすく教えられる指導者（指導書）
- 素材やものづくりに対する幅広い知識　職人さん等と広い人脈を持っている人材
- 成功した人のレクチャー
- 当組合に於いても高齢化・後継者不足等により、ものづくりに従事する作り手が減少しており、行政、学校と一体となった取り組みが必要
- 異なる世代間の交流をどのようにつくり出し、維持できるかが重要

■コンテンツ
- 幅広い年代や、多様な人にアプローチできるように、解説や案内文に気を配るべき
- ベースとして、つくる品物の歴史や背景、製造工程などの総合的な知識と理解が必要。それを踏まえて、誰に何をどのように学んでもらうかのコンテンツの吟味と周知の為に、企画や広報のノウハウが必要
- ユニバーサル・ミュージアムなど、博物館界での動きに常にアンテナを張り、自館の可能性を検討すること
- インクルーシブデザインの導入による多様な意見の聴取とデザイン設計への反映

■その他
- 受け入れる側の人員増、その上で特性に応じた対応のノウハウ
- まず、物理的な場だと思う。多様な人が集まるのに良い場を確保する
- 他部署、異分野、異種館等との連携や協働・双方向性、フラットな関係性

D-4　教育普及プログラムを検討する際に、講師として話を聞いてみたい人や連携したい団体等があればご記入ください

以下、抜粋して記載する。

- 東大インターメディアテク、竹中大工道具館、演劇博物館ほか
- NPO法人エイブル・アート・ジャパン　柴崎由美子さん
- 国立民族学博物館　広瀬浩二郎さん
- 辻井いつ子さん（辻井伸行さんの母）
- 株式会社ミライロ代表取締役社長　垣内俊哉さん、視覚障がい者のための手で見る博物館　館長　川又若菜さん
- 一般社団法人「注文をまちがえる料理店」
- 視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ
- ミュージアムエデュケーションを専門に研究されている方
- 日本文化、水墨画に関する有識者、企画展に連携した内容について講義頂ける方
- 重要無形文化財保持者
- 人形関係の方
- 将来的には、例えば地域の無形文化財である西ノ内和紙についてレクチャーしてくれる団体等と連携したいと考えているが、具体的にはまだ決まっていない
- 学校の先生・実際に伝統工芸等のものづくりを行っている人、団体
- 各教育機関（小中高校、特支、高齢者施設など）の関係者
- 地域で活躍されている方
- 教育普及に関しては、地域の方々・団体との連携が欠かせないので、そうした方々との連携は引き続き行っていく。プログラム作成という意味では、想定する内容によるので現時点でこの講師というような方はいない

D-5　貴館が参考にしたり、注目している他館の取り組みがあれば教えてください

以下、抜粋して記載する。

- 東京国立近代美術館のこども向け教育プログラム
- 徳島県立近代美術館、福岡市美術館
- 京都国立近代美術館
- 目黒区立美術館、東京都庭園美術館
- 徳島市立美術館のユニバーサルミュージアムの取り組み
- 自然史系博物館の各種取り組み
- 三重県立美術館や愛媛県立美術館など県立美術館の活動を中心に注目している
- 森美術館、東京都美術館、千葉市美術館、福岡市美術館、坂本善三美術館
- 富山県美術館の学校教員向け鑑賞ガイダンスプログラム
- 国立民族学博物館　準教授　広瀬浩二郎氏の企画展・WS 徳島県立美術館　竹内利夫氏、亀井幸子氏の企画展・手話動画の取り組み等
- 兵庫県立考古博物館の教育普及事業など考古資料を活用した取り組み
- IAMAS（情報科学芸術大学院大学）
- 国立科学博物館
- 京都国立近代美術館ほか感覚をひらくプロジェクト
- 東京都美術館　とびらプロジェクト
- 京都や金沢など伝統工芸が盛んな地の美術館
- 昭和のくらし博物館
- ソーシャル・インクルージョンの重要性については一定程度認識しているつもりだが、本施設のように江戸～大正期の建築物を博物館施設の多くとして利用している場合は、建物構造上バリアフリー化が難しい。ハード面では部分的な対応が限界だが、ソフト面での対応を心掛けたいと思っている
- 東京都美術館、東京都現代美術館、横浜美術館、千葉市立美術館などの取り組み
- ウェブマガジン「ここ」、アトリエ・エレマンプレザンの活動など
- アイヌ民具を収蔵・展示している館の取り組みや動きについては、できるだけ理解したいと思っており、その中で参考になるものは取り入れていきたいと考えている

D-6　参考になると思われる研修会や研究会があれば教えてください

以下、抜粋して記載する。

- 「大学における文化芸術推進事業」博物館を活用した「健康寿命」増進プログラム開発のための学芸員研修会（九州産業大学実施）
- 国立美術館が開催している研修会
- 本財団は「おおいた障がい者芸術文化支援センター」の運営業務を県から受託しており、美術館では同センターと連携した展示等を行っている
- 横浜美術館の取り組み
- 8月20日、21日に開催する「VTC／VTS　日本上陸30周年記念フォーラム2022　対話型鑑賞のこれまでとこれから」
- 株式会社ミライロ　代表取締役　社長　垣内俊哉氏のユニバーサルマナー研修会（有料）　国立民族学博物館　竹内利夫氏、亀井幸子氏の定期的に行われる講座“Leadership Exchange in Arts Disability（LEAD）”ワシントンDC, ケネディーセンター主催
- 京都国立近代美術館の「感覚をひらく」、兵庫県立美術館の「美術の中のかたち－手で見る造形」
- ユニバーサルミュージアム研究会
- 全国美術館会議の教育普及研究部会
- 日本工芸会の研修会等
- 毎年、学校教職員を対象にした研修会をMIHO MUSEUM等で開催されている。当館ではスタッフ向けの研修会も行っている

5. まとめ

今回の調査で、教育普及を担当するスタッフの数がゼロ、または1～2名のミュージアムが多くを占めていることが明らかになった。その一方で、多人数の教育普及担当者を配置しているミュージアムは、多様なニーズに応え、多様なプログラムを展開していることも明らかになった。このように教育普及に力を入れることができるミュージアムの数は限られており、その多くは、単館で伝統工芸や伝統産業を扱うミュージアムというよりは、近現代アートから工芸館まで併せ持つ総合的なミュージアムであった。

また、地域の学校等と連携した、子ども向けのプログラムには多くのミュージアムが取り組んでいたが、障害のある人に向けたプログラムは、車椅子やトイレの設備、視覚や聴覚に障害のある人向けのものが多く、量的にも、多様性の観点からも限られていることも、今回の調査で明らかになった。これまで行われた先進的な取り組みから多くを学びながら、さらに様々な障害のある人向けのプログラムについて考えていく必要があるだろう。

なお今回のアンケート調査では、ミュージアムでの教育活動を表す日本語としてもっとも普及している「教育普及」という言葉を用いたが、世界的な潮流としては、エデュケーション（教育）という言葉に潜む、教えを一方通行的に授けるという関係性からの脱却、双方向の学び合い、ラーニング（学習）を重視したものへとその内容が変わりつつある。

このような時代背景のなかで、たんぽぽの家としては、教育普及担当者を若干名抱える、比較的小規模の伝統工芸や伝統産業を扱うミュージアムと連携し、お互いに学び合うことで、他にはないオリジナリティのあるプログラム開発をめざすべきであると考えている。

2 ヒアリング調査

❶九州国立博物館

提供：九州国立博物館

《 **基本情報** 》

- 住所：福岡県太宰府市石坂4-7-2（太宰府天満宮横）
- 開館時間：9：30～17：00（入館は16：30まで）※夜間開館の実施についてはHPでご確認ください。
- 休館日：月曜日（月曜日が祝日・振替休日の場合は翌日）、年末
- 入場料：平常展（一般.700円;大学生.350円; 高校生以下または18歳未満、満70歳以上、障害者手帳等を持参の方およびその介護者1名.無料）
- 職員数：常勤47名（独立行政法人国立文化財機構:27名、福岡県立アジア文化交流センター:20名）、非常勤（未回答）、ボランティア247名、うち教育普及担当者数：常勤4名、非常勤5名、ボランティア30名　※2022年度時点の人数

●概要

東京、奈良、京都に次ぐ4番目の国立博物館。展示のほか、日本と交流があったアジア、ヨーロッパ各地の文化を体験型展示室「あじっぱ」で実際に体験できるようになっている。

●展示について

九州が日本におけるアジア文化との交流の重要な窓口であった歴史的かつ地理的背景を踏まえ「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える博物館」を基本理念に、旧石器時代から近世末期（開国）までの日本の文化の形成について展示している。

●アクセシビリティについて

令和元年より多様な方に博物館を楽しんでいただく取り組みをより一層深めていく。

- 当館ボランティアによる手話通訳付きミュージアムトークの実施
- 当館ボランティアによる手話通訳付きの寸劇を特別展「三国志」で実施
- 手話通訳付きバックヤードツアーを対面・オンラインで実施、オンラインの際には全国各地からの参加があった。
- 特別展「室町将軍」及び「三国志」では閉館後に展示室を明るくし、視覚障がい者向け観覧ツアーを実施
- 視覚障がい者のためのバックヤードツアーやレプリカ&楽器体験を実施
- 外国人のための「やさしい日本語」での博物館見学を実施
- レプリカに触れながら作品を鑑賞できる「ならべてわかる本物のひみつ」展では、点字付きのキャプション、作品配置の触知図、手話動画での解説を設置した。
- 点字・触知図付きの文化交流展示室（平常展）案内を希望者に配布
- 令和4年より新音声ガイドシステムを導入、アプリを起動すればスマートフォンのカメラが設置さ

↑「ならべてわかる本物のひみつ」展の展示風景。向かって左側が触れるレプリカ。

れたカラータグを認識し、音声・テキスト表示・手話動画での館内案内、作品解説に対応する。

- その他、年間10団体ほどの障がい者団体から特別対応の申し込みがあり、要望に応じて楽器やレプリカ、模型を触りながら解説を聞くワークショップ等を行っている。

●教育普及プログラムについて

- 学芸員によるミュージアムトーク
- 特別展、特集展示の際の講演・講座
- 学校教育活動支援事業（県内の小中学校対象の博物館紹介・鑑賞ツアーなど、年間約30校。交通費は財団ご支援による）
- 移動博物館車によるアウトリーチ活動（学校・博物館・商業施設など）
- 展示室からのオンライン授業（コロナにより増加）
- 特別展「ポンペイ」や文化交流展示室（平常展）で視覚障がい者と晴眼者で作品を楽しむ対話型作品鑑賞ツアーを実施
- 弥生時代の実寸大の甕棺（かめかん）模型を使った王の埋葬体験ワークショップを実施
- その他、特別展、文化交流展関係の教育普及プログラムを多数実施

●その他

- 障がい者向けのイベントや対応の際は、事前のヒアリングを地元の福祉団体や特別支援学校に行っている。当事者へのチラシ・HPなどの広報が届きにくい場合、団体との交流による口コミが重要。信頼関係が来館につながっている。地元団体との交流を通してインクルーシブミュージアムを目指す。
- アクセシビリティに関する取り組みは教育普及担当だけでなく、博物館に関わる全ての職員、ボランティアが意識することが重要。多様な方に博物館を楽しんでいただくためには多様な職員での対応が必要となる。今後は定期的なユニバーサルマナー研修などを検討していきたい。

調査日：2022年9月16日
回答者：西島亜木子（九州国立博物館学芸部企画課主任研究員、教育普及担当）、加藤小夜子（九州国立博物館展示課主任研究員、教育普及担当 中学校社会科教員）

2 ヒアリング調査

②木組み博物館

《 基本情報 》
- 住所：東京都新宿区西早稲田2丁目3−26 ホールエイト3階
- 開館日時：火・水・木 曜日・月1回の土曜日
  10:00〜16:00
  年末年始、そのほか臨時休館あり
- 入場料：無料
- 職員数：常勤2名、非常勤1名、ボランティア5名、うち教育普及担当者数：常勤 2名、非常勤1名
  （全体で学芸員4名）

●概要

2015年、東京 早稲田に開館した、日本の伝統木造建築の技術を伝える博物館である。代表的な技術であり、親しみやすさから「木組み博物館」と名前をつけた。木組みを中心に左官、漆などの伝統技術や素材、道具などを紹介している。従来の展示中心型から、五感で体験することにより、能動的で深く心に刻まれる参画型の生きた博物館で、展示物のほとんどすべてに触ることができる「触れる博物館」である。子どもからお年寄りまで、専門家や外国人、障害者など、多くの人でにぎわっている。

●展示について

2つの展示室で常設展示を行っている。第1展示室では木組みを中心に50点を超える大小の木組みがあり、大きなものは高さ2.3mにおよぶ薬師寺三重塔の部分模型がある。第2展示室には、木組み以外の日本の伝統木造建築の技術である、左官、漆、彩色、錺金物、瓦などをはじめ、大工道具や銘木などが展示されている。他の博物館ではできない、木組みを実際に組む・ばらすという貴重な体験ができる。

●アクセシビリティについて

- 周辺には日本点字図書館や日本視覚障害者団体連合など、視覚障害者支援に関する施設が複数あり、知的障害者が利用する施設や高齢者施設などもある。そのため、障害者や高齢者の来館も多い。
- 視覚障害者にとっては、自分の手で展示物に触ることができるので、その喜びは大きい。「自分は博物館にはもう縁がないと思っていたが、こうして観ることができてうれしい限りだ」と感激し数時間かけて見学され、何度も訪れた人があった。
- 館長は声かけや、説明など積極的に対応し、あいさつなどの簡単な点字も勉強している。
- 館内は入り口から展示室に至るまで、バリアフリーになっており、車椅子でも見学ができる。
- 展示物の説明のQRコード化に取り組んでおり、キャプションと共に英語表記も推進している。

●教育普及プログラムについて

- 小学校からの見学、サマー体験プログラム、社会体験として一日館長など、区内の小学校を中心に、他県からの見学もある。
- ワークショップとしては、子どもも楽しめるプログラムの開催。「兜を作る」「寄木細工作り」「カリンバ」「バード・コール」などを開催した。
- 不定期に講演会を開催している。宮大工棟梁の

↑メイン展示物である「薬師寺三重塔の大型部分模型」。実際に触ることができる。

故・西岡常一の唯一の弟子である小川三夫氏の講演、書家による檜大板への揮毫（きごう）はじめ、ユニークな講演会を開催している。

- 博物館を身近に感じてもらえるようにと、「木組みの森劇場」という名前で毎月、読み語りと、館長のミニ講座を開催している。これまで53回を数える。
- 館外活動として、近隣の保育園に出前授業、新宿区のイベントに毎年参加、国土交通省の霞が関デー、東北歴史博物館企画展に参加、など館外でも木組みに親しんでもらっている。また、館長は大学や自治体はじめ各所で講演を行い、日本の伝統木造建築の技術と文化の素晴らしさを多くの人に伝えている。

●その他

- 館長の谷川一雄氏は、日本の伝統木造建築の技術と文化がこのままではなくなってしまうという危機感を持ち、何とか残さねばという強い想いから博物館をつくった。東大名誉教授の故・内田祥哉先生が来館の際に「このような素晴らしい取り組みは、本当は国を上げてやらないといけないんじゃないか！」と言われ、木組み博物館を高く評価してくださった。
- まず、展示物を見て、触れて、五感で感じてほしい。そのために説明は極力少なめにし、疑問に思ったことや知りたいことは、展示物のそばに置いてある資料を見る、館員に質問するという形をとっている。
- 多くの人が気軽に来館できるようにと、東京の山手線内に開館すると決め、この地を選んだ。

調査日：2022年12月1日
回答者：谷川一雄（木組み博物館館長）

2 ヒアリング調査

③さいたま市岩槻人形博物館

《 **基本情報** 》

- 住所：埼玉県さいたま市岩槻区本町6-1-1
- 開館時間：9:00～17:00
- 休館日：月曜日（休日の場合は開館）、年末年始（12月28日から1月4日まで）＊臨時休館日あり
- 入場料：一般 300円（200円）、高校生・大学生・65歳以上 150円（100円）、小中学生 100円（50円）
  ※（　）内は20名以上の団体料金
  ※障害者手帳を持参の方およびその介護者1名は半額
  ※展覧会により観覧料が異なる場合がある。
- 職員数：常勤9名、非常勤11名、ボランティア7名、うち教育普及担当者数：常勤2名、非常勤1名、ボランティア7名

●概要

施設の所在地である岩槻はもともと人形の町として知られている地域である。2005年に岩槻市がさいたま市に合併したことに伴い、翌年に、人形を市の魅力ある文化資源や伝統産業として位置付け、その普及のための建物をつくるための計画がスタートし、2020年にオープンした。人形を専門とした公立博物館は全国でも初めての試みである。

●展示について

2つの展示室で常設展示を行っており、展示室1では地域の技として、埼玉県の人形作りについて、その道具や工程を紹介している。展示室2では人形自体の普及をテーマに、日本の古典人形を中心とした展示を行っている。その他、特定のテーマによる企画展も継続的に実施している。

●アクセシビリティについて

- 多言語でのパネル展示などに取り組む。近隣の「大宮盆栽美術館」が、海外からの来場者も多く、多言語対応をしっかりしていたため、参考にしている。
- 施設のあるさいたま市は「バリアフリー法」や「福祉のまちづくり条例」に重きを置いた政策を続けてきている。

●教育普及プログラムについて

- 教育普及の一環として、ギャラリートーク、講演会、参加型ワークショップ、学校の校外学習の受け入れなどを企画・開催している。
- ギャラリートークとして、毎月22日の午後に、会場で展示解説を行っている。事前にアナウンスを行い、来てくれた来場者を対象に実施している。1度のツアーは30分程度。
- 学術的な内容で、大学の先生や他館の学芸員などを招き、展示品や人形文化にまつわる講演をしてもらっている。講演会には誰でも参加でき、職人さんが参加することもある。
- 参加型ワークショップとして、人形博物館ラボラトリー、略して「にんラボ」というタイトルでのワークショップを行っている。ワークショップの内容は時期によって異なるが、実際に伝統的な人形作りにまつわる素材や道具に触れてもらい、匂いや手触り、音など、五感を意識した取り組みとしている。対象者はワークショップによって異なり、大人対象のものや子ども対象のもの、年齢制限を設

↑人形の頭。桐の粉と生麩糊（糊の一種）を練ってつくった桐塑（とうそ）生地を型抜きしてつくられる。製作は手作業で行われる。

けたものなどがある。

- 校外学習として主に児童を対象に、ボランティアスタッフの解説とともに人形作りの動画を視聴してもらったり、「ワークシート」を解いてもらいながら展示室を鑑賞してもらったりする取り組みを行っている。学校の受け入れは1日で最大6クラス（同時には3クラス）程度で、ボランティア以外にも常勤・非常勤スタッフが担当することもある。
- 学校に向けての広報としては、市内の小学校と特別支援学校の校長先生が集まる会での案内などをしている。
- 教育普及の取り組みの企画は、学芸員資格を持った常勤のスタッフが主として担当しており、実施にはボランティアスタッフに関わってもらっている。

●その他

- 障害のある人との関わり

特に意識をして特別支援学校だけに声かけをするようなことはないが市内の学校へ広く広報する中で、支援学校や支援学級の人たちが来場することがある。ユニバーサルデザインによる施設であり、解説は常日頃からわかりやすさを念頭に置いていることから、その際には、合理的配慮については常に意識しつつも、今のところ何か特別な対応（人員を増やすなど）はせずに、障害のあるなしに関わらない対応ができているのではないかと感じている。こちらから依頼はしていないものの、ワークショップの場合は支援学校の先生がマンツーマンでついてくれていた。地域の生活介護施設や就労継続支援B型事業所などからの来場もある。

- 外部との関わり

人形博物館はあくまで博物館のため、学芸員が収蔵物の調査研究等は行っているものの、実際にものをつくれるような伝統的な技術を持った人はいないので、人形をつくるワークショップでは、外部の職人に講師を依頼している。教育普及という側面から考えても、そういった外部の職人との関わりが重要になると感じている。

調査日：2022年12月1日
回答者：清水隼人（さいたま市岩槻人形博物館 管理係 主査）

2 ヒアリング調査

④多治見市美濃焼ミュージアム

《 基本情報 》
- 住所：岐阜県多治見市東町1-9-27
- 開館時間：9:00～17:00
- 休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始(12/28～1/3)
- 入場料：大人 320円、大学生 210円、高校生以下、障害者手帳の交付を受けている方とその付添いの方1名は無料
  団体料金(20名以上)：大人 260円、大学生 150円
  年間パスポート 1,050円
- 職員数：常勤4名、非常勤3名、ボランティア0名、うち教育普及職員：常勤2名、非常勤0名

●概要

もともとは「岐阜県陶磁資料館」という県の施設だったが、2012年に多治見市へ移管され、それに伴い現在の「多治見市美濃焼ミュージアム」へ名称が変更された。建築は県の予算で建てられ、現在は市の予算で運営、また経営自体は外郭団体である「公益財団法人多治見市文化振興事業団」が受託して行っている。美濃焼1300年の歴史と、人間国宝をはじめ美濃を代表する陶芸家の作品を展示するとともに、様々な企画展を開催し、美濃焼の歴史を多角的に紹介している。

●展示について

常設展示では、飛鳥時代の須恵器から、岐阜県にゆかりのある6人の人間国宝による現代の作品まで―「美濃焼1300年の流れ」や、美濃を代表する陶芸作家の作品「現代美濃陶芸の精華」を展示し、定期的に展示品を入れ替えながら、美濃焼の歴史と現在を紹介する。また、2016年に開設された「荒川豊蔵展示室」では、豊蔵に師事していた加藤孝造氏から受贈いただいた多くの荒川豊蔵作品を展示している。また、さまざまな企画展を実施している。

●アクセシビリティについて

- 岐阜県では特にアクセシビリティに関する条例などは施行されていないものの、美濃焼ミュージアムとして独自の取り組みを行っている。ハード面に関しては多目的トイレの設置等の対応を行っている。なお、建物自体は1988年の建設の際からスロープが設置されるなど、バリアフリーが意識された設計になっている。
- 多言語対応にも取り組み、ウェブサイトや広報で多言語化を進めているほか、常設展での説明文やキャプションにも英語を併記している。英語版解説の配布資料もある。今後は中国語表記にも取り組んでいきたい。

●教育普及プログラムについて

- 今回の調査の回答者である、岩井館長、岩城さんの2名が担当されている。岩井館長はもともと学校教員だったこともあり、ミュージアムの事業として子どもたちを巻き込むような新しいプログラムを立ち上げている。
- 岐阜県の美術館2施設には学校教員が出向し、学校とミュージアムの連携がある。
- 館内でのワークショップやコンサートの開催など

↑美濃焼ミュージアム内観

のほか、学芸員によるギャラリートークや近隣の小学校の社会科見学の受け入れを行っている。また、美濃焼ミュージアムでは五感を使った鑑賞を大切にしており、所蔵品の茶碗を実際に両掌に包み、感じる鑑賞を行っている。

- 今後は所蔵品の茶碗で実際に茶を飲んでみる、といったプログラムも行う計画があり、所蔵品を傷めないために、徹底したリサーチを行わなければいけないと考えている。
- 中学校に出張して、子どもたちにお茶碗を手に取ってもらい、その後ろくろで実際にお茶碗をつくってもらう、といった出張授業も行っている。

●その他

- 放課後等デイサービスを行っている団体と連携をしており、今後は特別支援学校との連携も増やしていきたいと思っている。
- 3年に1回開催される「国際陶磁器フェスティバル美濃」の一環として、美濃焼ミュージアムでは2014年に「アール・ブリュット美濃展」という障害のある人たちの作品を紹介する展覧会を行った。
- ミュージアムの人材の育成という視点では、外部より専門家を招き、作品の取り扱いに関する研修などを行っている。また、職員が研修会に参加し、ヤマト運輸や日本通運などの美術運搬スタッフに作品の扱い方を学んだり、他館を含め意見交換をすることがある。
- 文化庁主催の学芸員研修などには、全国のミュージアムから応募が集まるため倍率が高くなり、比較的小規模なミュージアムは参加が難しいこともある。
- 美濃焼ミュージアムは手で触れる唯一無二のミュージアムをめざしており、引き続き手で見る、手で感じることに重きを置いた鑑賞プログラムを実施していきたいと考えている。触れることで鑑賞の目が養われ、また障害のある人の鑑賞にもつながるのではないかと考えている。

調査日：2022年9月22日
回答者：岩井利美（多治見市美濃焼ミュージアム館長）、
岩城鮎美（多治見市美濃焼ミュージアム学芸員）

2 ヒアリング調査

⑤京都伝統産業ミュージアム

《 **基本情報** 》

- 住所：京都市左京区岡崎成勝寺町9丁目1
- 開館時間：9:00～17:00
- 休館日：不定休
- 入場料：無料（ただし、有料企画展も開催可能）
  ※2023年9月より有料入場に移行
- 職員数：常勤14名、非常勤10名、うち教育普及担当者数：常勤5名、非常勤6名

●概要

以前は京都伝統産業ふれあい館という名前で、財団を作って運営していた。2020年3月に京都産業振興センターが事業主体者となりリニューアルオープン。京都市の伝統産業74品目を一堂に集め、体系的に紹介している。実際の作品だけでなく、製作工程を解説したパネルや動画も設置。素材・道具の展示、職人による実演なども行っている。伝統工芸品に実際に触れたり、音を鳴らしたり、素材の匂いを嗅いだりする体験のコーナーが充実しており、ものづくりの過程を感じ、楽しめるような空間になっている。常設の展示のほか、企画展示室では新しい工芸のあり方を伝えるような自主企画も行っている。

●展示について

- 複数の伝統産業についてまとまった形で展示されている国内唯一のミュージアム。
- 企画展示室では自主企画を開催している。この場所では特に、伝統産業に関わる職人の今の仕事の多様性（いわゆる伝統産業でない活動もしている）を発信することをめざしている。
- 「工芸を分解する」というテーマで素材や形にフォーカスした企画をしたこともある。伝統工芸に対する敷居をさげるために、初めて工芸に触れる人が入り口としてわかりやすいような内容にした。

●アクセシビリティについて

- 工芸の距離を近づけたい、というのをミュージアムの目的に掲げている。特に若い人にはぜひ来場してもらいたい。
- リニューアル前は展示物の説明を3か国語で表示していたため、文字情報が多すぎた。現在は、日英のみの表示にしている。フランス語をはじめとした多言語対応はiPadに集約した。
- 大勢の小学生による見学が頻繁にある。そうした団体も受け入れられるよう、壁を作らずに、空間全体を見渡せるようなレイアウトにしている。
- 常設什器は、積み上げることで高さを変えられるようなものにしている。重ね方を変えるだけで、子どもが見やすい高さ（30cm）、机ぐらいの高さ（60cm）、子どもが触れないくらいの高さ（90cm）といったつくり方が可能。
- キャプションに記載する文章は、どの世代にもわかりやすく伝わるように、外部の編集チームに入ってもらい作成した。

↑「SHOKUNIN pass/path」展示風景。これからの工芸の座標を映し出した。

- 体験コーナーを多く設けている。企画段階では、視覚障害のある人のことも意識して考えたいという話をしていた。実際は、障害のある人のアクセシビリティというより、工芸や伝統工芸の敷居をさげたいというのが第一にある。触ったり、音を鳴らしたり、匂いを嗅いだりする体験コーナーが多くあるため、結果として視覚に障害のある人も楽しめる形になったのかもしれない。

●教育普及プログラムについて

- ミュージアムとして、教育普及プログラムの実施は大きな使命のひとつだと考えている。リニューアルオープン時には、さまざまな計画があったが、コロナ禍のため1か月で休館になり、計画を大幅に変更せざるを得ないところもあった。
- 京都には、観光と工芸を結びつける「観光案内士」がいる。その人たちが工芸や伝統産業のことも説明できるように研修の機会をもうけた。
- ガラスケースに入っているものばかりが工芸品ではない。たとえば、完成された工芸品としての桶を見せるだけでなく、素材の丸太から見せるような企画を行った。職人が斧をつかって丸太を切っていく「丸太解体ショー」をひらき、工芸品の素材や道具、職人の動きを見せる機会をつくったことも。本当に木をつかって桶ができているということを実感してもらいたい。

●その他

- リニューアルにあたって、ほかの美術館をリサーチした際は、スタッフの導線などを確認した。来場者が展示物を見る際に、スタッフの存在を感じることがないようにと考えている。
- 新しく宿泊施設などができる際に、京都の技術や意匠を取り込んだデザインにしたいという相談を受けたりもしている。
- インターンは時々受け入れるが、ボランティアはいない。パートタイムで学生や、何か国語も話せるような人など、さまざまな特技を持った人が関わっている。

調査日：2023年1月23日
回答者：山崎伸吾
（京都伝統産業ミュージアムチーフディレクター）

3 ラーニングプログラムの実施 京都

❶京都伝統産業ミュージアム

京都伝統産業ミュージアムでは12月15日～25日に実施した「ニュートラ展 in KYOTO」の会期中に、さまざまな人が参加できるものづくり体験のワークショップ、鑑賞ワークショップ、お茶会を実施した。会場は、京都伝統産業ミュージアム企画展示室、屋外スペースとした。
協力：株式会社京都産業振興センター、たんぽぽの家アートセンターHANA、Good Job! センター香芝

プログラム❶ ニュートラ対話鑑賞

【概要】
日時：2022年12月16日（金）15:00～17:00
会場：京都伝統産業ミュージアム　企画展示室
ナビゲーター：光島貴之（美術家・鍼灸師）
参加費：500円
参加者数：9名（うち視覚に障害のある人2名）

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
視覚に障害のある人と障害のない人が、伝統工芸品やニュートラのプロジェクトで生まれた製品を触ったり、対話したりしながら鑑賞することをとおして、これまでとは違った鑑賞の仕方を体験する。また、視覚に障害のある人がどのように伝統工芸品を鑑賞することができるかをみんなで考える。

●プログラムの流れ
展覧会「ニュートラ展 in KYOTO」の展示物を、目で観るのではなく触って鑑賞し、参加者同士で感想を交換した。参加者には、全盲、弱視、晴眼の人がまざっていた。以下のとおり4段階に分けて進行した。

1 導入
光島氏より参加者に向けて、見える人と見えない人とでは、「触覚」の捉え方が異なるかもしれないということが話された。見える人は手のひら、見えない人は指先まで使い細かいところまで感じ取ることを含めて触覚を語っているようだ。また、作品の奥行きなども、見える人は目で理解しているが、見えない人には別の情報源が必要である。

2 同じ物を全員で触る
展示品の一つ、密に織られた毛織物である緞通（だんつう）を触り、感想を交換した。

3 班に分かれて触る
1班に1名、視覚に障害のある人が入るように分かれた。和紙、人形、木工品などを触り、班内で感想を交換した。

4 まとめ
ふたたび全員で集まり、気づいたことなどを話し合った。

●ナビゲーター
光島貴之（美術家・鍼灸師）
10歳頃に失明。大谷大学文学部哲学科を卒業後、鍼灸院開業。鍼灸を生業としながら、1992年より粘土造形を、1995年より製図用ラインテープとカッティングシートを用いた「さわる絵画」の制作を始める。他作家とコラボレーションした「触覚連画」の制作や、2012年より「触覚コラージュ」といった新たな表現手法を探求している。2020年1月、ギャラリー兼自身の制作アトリエとなる「アトリエみつしま」を立ち上げる。バリアへの新しいアプローチを実践する拠点となることを目指して、活動の幅を広げている。

4

2

3

●考察

緞通は織り込まれた毛の色の境目が、手触りにあらわれていると感じる人もいれば、判別できないという人もいて、各々の感覚の違いを楽しんでいた。硬いはずの木工品の打刻の跡を触って「ふわふわしている」という感想をもった参加者がおり、視覚だけでなく触覚をつかって鑑賞することで、展示の楽しみ方に広がりがでることを実感した。終了後、ナビゲーターの光島さんからいただいた意見にもあったが、触覚をもとにした対話鑑賞は、見える人・見えない人が対等になれるという側面がある。今回は成人の参加者ばかりだったが、今後は子どもの参加も積極的に検討したい。光島さんからは最後に、NEW TRADITIONALの現状の製品には、触覚に重きをおいたものがほとんど無いのが残念だという意見をいただき、手触りだけで手元に置き生活に取り入れたくなるものを作ってはどうかというアドバイスもあった。

プログラム❷

浮造りで磨く木のプレート

【概要】
日時：12月17日（土）13:00〜15:00
会場：京都伝統産業ミュージアム　企画展示室
デモンストレーター：たむちゃん&まっつん（Good Job!センター香芝）
参加費：500円（仕上がったものを持ち帰る場合は材料費別途）
参加者数：5名

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
ニュートラ展でも展示した「たたいて みがいて つくる木のしごとシリーズ」の工程から浮造りの道具を使い、みがくという体験ができるようにした。浮造りは、木材の表面を何度もみがいて木目に凹凸をつけ、年輪を浮かび上がらせる伝統的な木材の装飾方法であり、根気よく取り組んで美しいプレートに仕上げることを知ることができるようにした。

●プログラムの流れ
はじめに、Good Job!センター香芝のスタッフより、「たたいて みがいて つくる 木の仕事シリーズ」がうまれた背景を説明した。次に、デモンストレーターのたむちゃんやまっつんより実演を交えながら、道具やその使い方の説明を行った。次に、これまで浮造りに取り組んできた日記をたむちゃんより朗読したあと、参加者がみがきたい木を選び、みがく工程を体験した。

●デモンストレーター
たむちゃん&まっつん
Good Job!センター香芝にて、ものづくりや流通の仕事などに取り組む。「たたいて みがいて つくる木の仕事シリーズ」では、銘木屋の見学や木の仕入れ、実際の製品づくりなど、最初から最後までの工程に関わる。

●考察
浮造りという伝統的な技法にはじめて触れる人が多く、使い方をいろいろな人に知ってもらうきっかけとなった。希望者はつくったものを持ち帰ることができるという仕組みにしたことで、より熱心にみがく行為に没頭していた。参加していた視覚障害のある人は、このワークショップをとおしてはじめて「光沢がある」ということを体感できた、という感想を述べていた。また、たむちゃんとまっつんが説明やデモンストレーションを行うことで、場が和み、参加者がリラックスして参加できていたように思われる。ミュージアムという場所柄、ほかにも多くの鑑賞者がいたため、石でたたくという工程は省いたが、その工程もあれば、より木に触れる楽しさを実感できたかと思われる。

プログラム❸

自分のルーツから模様を考える –棒人形とこけしのワークショップ–

【概要】
日時：12月18日（日）10:30～12:00
会場：京都伝統産業ミュージアム　企画展示室
講師：軸原ヨウスケ（デザイナー、COCHAE／ドンタク玩具社）
参加費：500円（棒人形の絵付け体験）、1500円（こけしの絵付け体験）
参加者数：10名

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
各地に伝わる郷土玩具。なかでも、東北地方のおみやげとして親しまれてきたこけしを自分なりにつくることで、郷土玩具への興味を深める。子どもから大人まで楽しんで参加できるプログラムとする。

●プログラムの流れ
はじめに、講師の軸原さんより、各地方に伝わるこけしの系譜からその奥深さを学ぶ。その後、子どもの頃の記憶をたどりながら、自分だけの模様を考え、棒人形やこけしに絵付けを行う。

●講師
軸原ヨウスケ（デザイナー、COCHAE／ドンタク玩具社）
2015年、新型こけし、創生玩具などのデザインプロダクトを開発する「ドンタク玩具社」を設立。従来の郷土玩具の「新しいかたち」を提案している。あそびのデザインをテーマに活動するCOCHAEのメンバー。民藝の根っこを丁寧に辿りながら、今日の美術や工芸のありかを探る近著『アウト・オブ・民藝』（軸原ヨウスケ・中村裕太共著、誠光社、2019）も注目を集める。

●考察
こけしへの興味が高い人、またこけしの本も出版している軸原さんが講師となるワークショップなので興味をもって参加してくれる人がいた。今回、こけしの形をしたものと、シンプルな棒人形を準備したが、それぞれの人が好きなかたちを選びながら参加していた。実際のこけしや棒人形に絵付けをする前に、紙に描いて練習できるようにしたことで、じっくりと描き込む人が多かった。入門編としては今回のようなやり方で楽しんでもらえたが、応用編として、ろくろなどを使ってこけし本来のふでのかたちや動きから絵付けしていくことを体感するプログラムの実施も考えられる。

プログラム④

0GYMで身体感覚を捉え直す

【概要】
日時：12月21日（水）13:00〜15:00
会場：京都伝統産業ミュージアム　光庭
講師：身体0ベース運用法（安藤隆一郎／京都市立芸術大学染織専攻講師）
参加費：500円
参加者数：9名

【内容】
●このプログラムで目指したこと
身体0ベース運用法に取り組む安藤さんとともに、昔からある民具をつかうことで、今の体の使い方とは異なる使い方を体験する。それによって、自分と道具との関わり、自分の身体や身体のつかい方を見直す機会、発見する機会とする。また、これまで身体0ベース運用法のワークショップに参加したことのある障害のある人が経験者として携わり、一般の参加者が参加しやすい雰囲気をつくる。

●プログラムの流れ
はじめに講師の安藤さんが昔の民具と人の動きについてのレクチャーを行う。次に安藤さんが収集している民具や民具をもとにしてつくった道具を用いて、「はこぶ」「座る」などの動作を体験する。当たり前の日常運動を昔から使われている民具を使って行うことで、楽しく身体を動かし、自分の身体について学び、ものと関わるときの動作に迫るものとした。

●講師
身体0ベース運用法（安藤隆一郎／京都市立芸術大学染織専攻講師）
身体0ベース運用法とは「身体」と「もの」との関わりから生まれる感覚、運動機能を染織・美術作家 安藤隆一郎が持つ「ものづくりの視点」から、「0」から見直すことで、人間が本来持っている「身体」の運用法を見出す試み。その「身体」とは医学やスポーツといった専門的なものではなく、私たちの身の回りにある「身体」のこと。身体0ベース運用法はアートが持つ多様なツールを使って翻訳することで、身体の消えゆく未来へ向けてその可能性を問い直している。

●考察
前半のレクチャーでは、かつては実際に道具をつかって、自分の体重よりもはるかに重い荷物を運んでいた様子を資料で見せていただいた。参加者は創作活動をしている人や、障害のある人、フリーランスなどがいたが、資料の写真と安藤さんのわかりやすいレクチャーのおかげで、「道具をつかって運ぶ」というイメージをもつことができ、後半のワークショップにスムーズに移行できた。レクチャーは室内、ワークショップは屋外と、会場を分けたことも雰囲気が変わり、集中して話を聞く時間と、身体をのびのびうごかす時間とのメリハリがついた。今回は「はこぶ」をテーマに据えたが、今後別のテーマでの展開や、「はこぶ」をテーマとして継続して障害のある人がファシリテーターになる可能性なども検討したい。

プログラム❺

クリスマス茶会

【概要】
日時：12月24日（土）11:00～、13:00～、15:00～　各1時間
会場：京都伝統産業ミュージアム企画展示室
監修：森野彰人（京都市立芸術大学教授／陶磁器）
席主、お運び：たんぽぽの家アートセンターHANA、Good Job！センター香芝メンバー
参加費：500円
参加者数：22名（3回合計）

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
ミュージアムという空間をより楽しむことができるよう、気軽に参加できるお茶会を開催した。障害のある人がつくった作品で空間を飾り、お茶や作品を囲みながら、会話が交わされるような空間がミュージアムの中で生まれることをめざした。

●プログラムの流れ
茶会のしつらえなどに障害のある人の仕事を取り入れ、参加者をもてなした。お菓子はこの日のクリスマス茶会にあわせて京菓子司末富がつくり、春日大社境内の杉でつくったプレートにのせてふるまわれた。茶碗は京都で活動する工房ソラや、みずなぎ学園で制作されたものを使用。福岡左知子さん（たんぽぽの家アートセンターHANA アーティスト）の織物を掛け軸に見立て、空間の中央に吊り下げた。11時にスタートする回を「クリスマス子ども茶会」として、乳幼児とその親を対象に参加を募り、希望する子どもには、甘いグリーンティーや白湯を提供できるよう準備した。毎回、障害のある人が自身の創作活動の紹介や飾られている作品の説明をし、席主として参加者をもてなした。

●監修
森野彰人（京都市立芸術大学教授／陶磁器）
最近の展覧会に、2019年「永守コレクション特別展示 時空を超えたオルゴールの世界」（日本橋高島屋S.C／2019年）、「京都の陶芸展－5家17人の挑戦－」（しもだて美術館／茨城／2020年）、個展「おしゃべりな文様」（日本橋高島屋S.C／京都高島屋／2021年）など。1998年に第5回国際陶磁器展「美濃'98」銀賞、2007年に京都市芸術新人賞、2012年にタカシマヤ美術大賞を受賞。現在、京都市立芸術大学美術学部教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター所長、IAC（国際陶芸アカデミー）会員。

●考察
どの会も、終始和やかに行われた。実際に道具に触れたり、お茶をたてる様子を間近に見ながらお茶やお菓子を楽しむ機会をつくることで、より伝統を身近に感じられる機会を提供できた。初対面の参加者どうしも、飾られている作品や、障害のある人の言葉をきっかけにあっという間に会話が盛り上がり、お茶会という場が、さまざまな世代や立場の人がつながることのできる、すぐれた交流の場であることを実感した。ミュージアムで実施するにあたっては、水場の確保や動線など、事前の準備やシミュレーションが肝要である。

学芸員の声

山崎 伸吾（京都伝統産業ミュージアチーフディレクター）
NEW TRADITIONAL事業に関わるなかで、学びや気づきが多かった。とくに、アクセシビリティについて考える機会となった。そもそも、多様な人が利用しやすい環境づくりについては、2020年春にミュージアムの展示を一新する際に多言語や年齢層もふくめ検討を重ねたという経緯があった。ミュージアムの重要な機能は「伝統産業・伝統工芸と社会とをつなげる」ことであると考えるが、これに関しては、ものづくりを素材を含め自分たちの手の中に取り戻すというニュートラの着眼点が自分自身の視野を広げてくれたように感じる。工芸と福祉とが別の分野にあるのではなく、同じ社会のなかで同じ多様性の選択肢として存在することで、社会の次のステップにつながるのではないだろうか。

3 ラーニングプログラムの実施 岐阜

②多治見市美濃焼ミュージアム

↑陶芸用の土の製造・販売を手がけるカネ利陶料の岩島利幸さんの案内で、鉱山を見学した。

プログラム

CLAY WORKS　原土から砕いて染める：美濃地方の土をあじわい、オリジナルの陶土バッグをつくろう！

【概要】
日時：2023年3月18日（土）　10:00～12:00、14:00～16:00
会場：多治見市美濃焼ミュージアム　研修室
※都合により、3月16日に開催中止決定
講師：高橋孝治（デザイナー）
応募人数：11組14名
協力：多治見市美濃焼ミュージアム、水月窯、カネ利陶料有限会社

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
昔から土は人にとって身近にあり、生活の道具や仕事に使われてきた。本プログラムでは、その身近な素材である土から、ものづくりの可能性を探ることとした。
土を砕き水を加えて泥をつくる。その泥から布を染めることをとおして、美濃地域の中でも採掘場所によって土の色が異なることを体験を通して知ることができるようにする。粉にした原土が加水によって粘土へ、さらに水を加えて泥へ質感を変え、それが焼き物にも染物にも使えることを自分の手のひらで体感できるようにする。
実施にあたっては、事前に講師と事務局スタッフが多治見地域の鉱山を見学したり、地元の土についてミュージアムの職員とともに学びを深める機会をつくった。

●プログラムの流れ
座学および土をもちいた顔料染めを体験するワークショップ。
染めには、日本最大の窯業地である美濃地域の原土を主につかう。これは、約500～400万年ほど前に美濃地域に存在した湖の底に堆積した土である。参加者各自が土を砕いて、ふるって、擦って、細かくして、泥にする。

高橋さんのファシリテートのもと、以下のとおり2段階に分けて進行する。

1 巨大絵本「やきものの土で染めてみよう―土ができるまで―」
いま足元にある土がどうやって生まれたのか。高橋さんが制作した巨大絵本をつかって、地球と土と人の関係について学ぶ。日本最大の窯業地、美濃地域の土の成り立ちについても分かりやすい解説を行う。

2 創作ワークショップ「美濃地方の土をあじわい、オリジナルの陶土バッグをつくろう!」
陶土染をする。美濃地方を中心とした、選りすぐりの原土から好きな土を選び滑らかな泥をつくり、布に染め、バッグをつくる。

●講師
高橋孝治(デザイナー)
(株)良品計画の企画デザイン室に勤務した後、2015年に愛知県知多半島に移住し、中世から窯業が続く常滑にスタジオを構える。人や環境を中心におき、地域の方々の生業や活動に伴走する。4児の父。2016-2018年常滑市陶業陶芸振興事業 推進コーディネーター。2017-2019年六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブ・ディレクター。

●考察
開催中止となったため、本プログラムは事前の打ち合わせ、調査、プログラムの立案、参加者募集までで終わった。しかし、ミュージアムをはじめとした協力団体との対話から、地元の土をつかい、土の可能性を体感できる有意義なプログラムだと実感している。

↑巨大絵本(※別会場で行った時の様子)

↑土で布を染める(※別会場で行った時の様子)

学芸員の声

岩城 鮎美(多治見市美濃焼ミュージアム学芸員)

教育普及を担当している。土=誰もが理解できる素材、土=ものづくりの原点というNEW TRADITIONALの着眼点に共感を抱いた。土のワークショップ=焼くものと知らずしらずのうちに決めつけていたので、染色という方法に、誰でもできるのかという点で最初は戸惑った。

◎中止になったが、もし実施できたとしてプログラムに期待していること。

- 泥染めという地元の土の活用方法について、参加者がどう感じたかを聞き取りしたい。
- 誰でも応募できるということが本プログラムの要点になっているが、できれば多治見市在住の方に参加してほしい。多治見市民でも、陶磁器工場に比べて採掘場で原土を見る機会は減っている。どんな土が足もとにあるかを知っていただく、地元を知ることで、地域に愛着がわき文化に興味をもつきっかけになることを期待している。

◎中止になったが、もし実施できたとしてプログラムの課題と感じること

- 対象者を定めないことで、プログラムの精度を下げないかどうか。主催者が参加者をサポートできる範囲をきちんと想定・準備できるかどうか。
- どうやって継続していくか。土は焼くに限らず用いるという新しい視点がもたらされた。当館として、今後どんな教育普及プログラムが実施できるかを新たに考えたい。

3 ラーニングプログラムの実施 奈良

③平城宮跡歴史公園

1

プログラム

大極門を復原した木材にふれる
“ たたいて みがいて つくる 木工ワークショップ ”

【概要】
日時：2023年3月28日（火）　10:30-12:00、13:30-15:00
会場：平城宮跡歴史公園　平城宮・いざない館 多目的室
ファシリテーター：たむちゃん&まっつん（Good Job!センター香芝）
講師：酒井義夫（ろくろ舎代表／木地師）
参加費：500円
参加者数：11組15名
共催：平城宮跡管理センター
協力：奈良市埋蔵文化財調査センター、Good Job!センター香芝、株式会社torinoko

【内容】
●このプログラムでめざしたこと
専門的な木工機械の技術や制作環境がなくても、誰でも親しみやすい木工が体験できること。変化する木目のおもしろさを見て触って楽しむこと。木地師としてうつわづくりを行う専門家を講師に招くことで、木材やくらしの道具についての知見に触れる機会とする。また、普段よりこのプログラムに仕事として取り組んでいる障害のある人もファシリテーターとして招き、参加者をサポートしてもらう。

●プログラムの流れ
木材をたたいて・みがいてつくる木工ワークショップ。材料には、平城宮（奈良市）の大極門が復原された際の建築端材である国産のヒノキの木と、東大寺の外構を発掘調査した際に出土した石をつかった。木の表面を石で叩いたうえで、浮造り（うづくり）という伝統的な研磨方法でみがいていくと、凹凸と美しいツヤのある不思議な木目があらわれる。その工程を参加者に体験してもらう。

2

3

●講師

酒井義夫(ろくろ舎代表／木地師)

伝統的な木地師として技術を継承しながら、独自の視点から商品の開発やプロデュースなどを手がける。一方で道具とアートの境界線を探りながら実験的な作品を製作し続けている。

http://rokurosha.jp

●考察

今回、3歳から60代まで幅広い層が参加した。普段から平城宮跡歴史公園のものづくりの体験ワークショップに参加しているような人や、今回のように木を使ったワークショップであることに関心をもって参加した人がいた。また特別支援学校の生徒や家族、福祉施設の利用者とケアスタッフなどの参加もあった。多様な人が参加したが、石で木をたたいて、みがくというシンプルな工程のため、それぞれの人が自分のペースで楽しむことができたと思われる。また、大勢の人が一緒にたたくことで、打楽器のような音が鳴り響き、賑やかな空気をつくることができた。講師の酒井さんはものづくりのワークショップとして行うのもよいが、ワークショップといわずに「祭り」といってもいいような雰囲気だったと述べた。本プログラムは道具自体、木と石というどこの地域にでもあるもので行うことができるため、他の地域への展開も可能であると思われる。

1 大極門はどのような建築なのか、何につかわれていたかについて、平城宮跡歴史公園の職員が、大極門の当時の姿や復原作業について紹介した。

2 Good Job!センター香芝のスタッフとメンバーが、NEW TRADITIONALの取り組みのひとつである「たたいて みがいて つくる木の仕事」のうまれた経緯や製品について話をした。次に石でたたく、浮造りをするといった技法を道具を見せながら解説した。

3 好きな形の木材と石を選んで、たたいて、みがく体験を行う。参加者がそれぞれにたたく・みがく作業に取り組んだ。できあがったものを撮影し、小作品を各自持ち帰った。大きなものは後日平城宮跡歴史公園内の案内表示として活用される予定である。

学芸員の声

小田 倫之

(飛鳥・平城宮跡歴史公園サポート共同体
[一般財団法人 公園財団]
平城宮跡管理センター 体験学習係長)

平城宮跡歴史公園で復原した大極門の端材を使用することに加え、市内で発掘された石を使用したプログラムで、歴史に親しみも持っていただけたかと思います。今後も継続開催していただければと考えます。参加者が記念に持って帰ることができるような小さな木工品の制作もできればさらに良いのではないでしょうか。

調査の振り返りと今後の展望

伝統のものづくりが文化のなかで根づき、人々の生活を豊かにするために、ミュージアムはどのような役割を果たし、そこにどのように人は関わることができるのか、この調査と試行でわかったことを振り返る。

1）振り返り

❶ ミュージアムでの障害者などのアクセシビリティと教育普及プログラムのアンケート調査

今回実施したアンケートの回収率は26.5%であり、目標としていた30%には及ばなかったとはいえ、アクセシビリティと教育普及プログラムに対して一定の関心が寄せられているということはその数値、および回答の自由記述の分量からも伝わってきた。

教育プログラムを行っているミュージアムからは「事前に参加者と打ち合わせをしたうえでの視覚障害者を対象とした触覚ワークショップ」「離島や特別支援学校への移動博物館」「本物の土器を使っての鑑賞」など、障害者や子どもなどに向けたユニークかつ柔軟なプログラムを実施しているとの回答も見られた。また体験型のプログラムだけでなく、考古資料、民族資料の貸し出しやシンポジウムなど、専門的な知識に触れられる機会の創出に取り組んでいるところもあった。

また、多様な人がものづくりについて学ぶ環境をつくるために必要なものとして、障害特性やバリアフリー、ユニバーサルデザインなどを学ぶ研修、異なる世代や分野との交流をあげるなど、積極的な回答も多く見られた。また、参考としている他施設の取り組みなどが多くあがってきたことからも、先進的な事例や知識について知ったり、学び合う研修の機会が求められていることがうかがわれた。

ただ、伝統工芸や伝統産業等に関わるミュージアムは小規模なところが多く、アクセシビリティや教育普及の必要性自体は認識されていても、教育普及担当の職員がいないなど、十分に手が回らない組織も多く存在しているであろうことも、調査結果から推測できた。今後は、情報共有と研修を充実させる仕組みをつくっていくことが望まれる。

❷ ヒアリング調査

アンケートの回答施設から5カ所を選び、オンラインまたは訪問によりヒアリングを行った。規模の大小、運営主体（官民等）などは多様であることを重視した。

九州国立博物館では合理的配慮の視点から、触地図の設置などを行っている。木組み博物館ではそもそも、触りながら感じてもらう展示を行ってきた。さいたま市岩槻人形博物館では道具や素材に触れてもらうワークショップを行っており、これは素材を直に感じることができるという伝統のものづくりの特徴を生かしたプログラムと言える。多治見市美濃焼ミュージアムでは、まずはお茶碗を手にとってもらい、その後に実際にろくろでつくってみるという、体感的にも知識としても理解を深めるプログラムを実施している。京都伝統産業ミュージアムでは、来場者と工芸の距離を近づけたいという目標から、パネルや動画で製作工程を解説するといった工夫や、観光の視点からも多言語の対応を行っている。なお、そ

れぞれの運営団体の方針により、職員のみが教育普及を行うところもあれば、ボランティアなどがサポートを行うところもある。

こうした創造的なプログラムはこれから教育普及に取り組みたいと考える施設にとって非常に参考になると思われるため、広く普及していくことが必要だろう。

❸ ラーニングプログラムの実施

ラーニングプログラムにておいては、各施設との打ち合わせを経て、多様な人が参加でき、それぞれの地域性や文化などを感じられ、伝統やものづくりを新たな視点で捉えられるようなプログラムを提案し実施した。京都伝統産業ミュージアムでは、京都市立芸術大学の教員や学生と障害のある人によるお茶会や身体ワークショップ。多治見市美濃焼ミュージアムでは、美濃地方の土をあじわうワークショップ（※都合により開催中止）。平城宮跡歴史公園では大極門の木材を用いたワークショップを実施した。各プログラムは、それぞれの地域に住む人やミュージアムに関わる人が講師となって行うことができるものを意識しており、今後も各施設で継続していくことが望ましいと思っている。また、障害のある人が受講者としてだけではなく、ファシリテーターなど、プログラムをつくる側として関わることで、ミュージアムにおける障害のある人の新たな役割を提案することもめざした。

2）まとめ

今回の調査とプログラムの実施をとおして得られた知見から、障害のある人をはじめとした多様な人たちとの関わりをもつこれからのミュージアムの実現にむけ、以下の提案を行いたい。

● 学びあいの視点

現在、ミュージアムの教育活動の潮流として、一方的な知識や技術の伝達ではなく、双方向の学びあいの場づくりが望ましいと考えられている。ものづくりや伝統文化、地域産業などの生涯学習の場においても、多様な人の学び合いの拠点になるために、よりアクティブな関わりとしてのラーニングの視点を取り入れることが望ましい。

● 地域、ミュージアム独自の支援やプログラム開発

日常的にはなかなか学ぶ機会がない伝統のものづくりについて、そこの地域に行くからこそ学ぶことができる創造的なプログラムの開発が望まれる。また、伝統のものづくりは素材に直接触れることができるものも多く、その土地に根ざした素材などに触れ、知るきっかけとしてのプログラムが増えていくことが、地域のなかでのミュージアムの存在意義を高めていくことにつながると思われる。

● 情報共有、研修などの充実

今回の調査でわかったように、すでにいくつものミュージアムでユニークな実践が行われている。アクセシビリティの向上や教育普及のプログラムの充実を図っていくためには、こういった先進的な事例を広く共有できる仕組みが求められるだろう。

NEW TRADITIONAL（ニュートラ）は、
障害のある人とともに、伝統工芸をとおして新しいものづくりのありかたや、
それらが息づく生活文化を提案するプロジェクトです。
ものをつくることは、人と関わること。その土地や文化についても考えること。
これまで、各地でつくり手、つかい手、つたえ手が垣根をこえて交流し、
語り合う場をつくってきました。

❶伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー
活動当初より、さまざまな伝統工芸の産地をまわり、伝統工芸を新たな視点で発信している職人やつくり手に出会いました。各地の案内人の豊かなネットワークをとおして、福祉の現場にも生かしていけるようなアイデアに触れるスタディツアーを実施しています。

❷各地の福祉とつくり手の交流を生むエクスチェンジプログラム
2021年度から障害のある人と作家が互いの施設や工房などに滞在しながら、共同で作品や製品を制作するプログラムを実施しています。各地の産地やつくり手と直接出会うことで、ものづくりと地域の関わりを実感したり、あたらしいものづくりに取り組むきっかけになっています。

❸さまざまな視点で対話を深めるディスカッション
福祉でのものづくり、伝統でのものづくり、多様な立場や視点を持った人たちが、ニュートラのプロジェクトをとおして出会い、具体的にものづくり、関係作りをすすめています。対話し続けることで、ニュートラの「ニュー」とは何かを探る日々が続いています。

❹学びあう場づくりとしての、ニュートラの学校
これまでニュートラの取り組みをすすめるなかで、さまざまな疑問がうまれ、出会う人たちと対話しながら試行錯誤をしてきました。わたしたちにとって価値のあるものづくりとはなにか、そもそも価値とはどういうことか、生活を豊かにするようなものはどんなものか、伝統のものづくりを今の生活にいかすことができるか。これらの問いから得られた経験と感覚を多くの人たちと共有したいと思い、学び合う場としての学校をオープン。全国各地の受講者を迎えています。

❺教育機関との連携
美術大学・芸術大学と連携し、教育の現場でニュートラについて試行し、考える取り組みを行っています。

❻発信・販売
ウェブサイトや店舗への販売、見本市への出展によって製品を販売するとともにニュートラのファンや応援者を増やす取り組みをしています。また、つくり手どうしの横の繋がりをつくったり、そこから新しいものづくりのヒントを得るなど、ネットワークを広げています。

ウェブサイト／SNS

•ニュートラのウェブサイト
https://newtraditional.jp/
過去の取り組みや発行物がPDFで閲覧可能。限定コラムも充実。メニューをクリックすると聞こえる音声もお楽しみください。

•note
https://note.com/newtraditional
実例づくりのプロセスや背景、各企画のレポートやイベントのお知らせなど、さまざまな記事を発信中です。

•Instagram
https://www.instagram.com/newtraditional_gjp/
プロジェクトの膨大な記録からセレクトした写真を発信しています。ぜひチェックしてください。

伝統工芸・伝統産業などに関わるミュージアムでの障害者等のアクセシビリティと教育普及プログラムに関する調査報告書

発行日　2023 年 3 月 31 日
発行元　一般財団法人たんぽぽの家
〒 630-8044 奈良市六条西 3-25-4
Tel 0742-43-7055　Fax 0742-49-5501
E-mail　nt@popo.or.jp
U R L　https://newtraditional.jp/

デザイン　鯵坂兼充・岡田尚子
写　真　仲川あい（p28）
衣笠名津美（p29、p31、p32、p33）
河合秀尚（p30）

本冊子はNEW TRADITIONALのウェブサイトで音声読み上げ可能なpdfデータを公開しています。書字へのアクセスが難しい方はご活用ください。
そのほか本冊子へのアクセスに関するお問い合わせは、発行元の一般財団法人たんぽぽの家までご連絡ください。

文化庁